

「新明解国語辞典」三省堂 1972年1月24日刊を読む

あとがき - 編集経過 -

1. 本書は12年の準備期間を経て7年間の日子で編集された。その前段3年間において金田一・山田・柴田は分掌、基礎原稿を作成し、後段4年間に山田が文体統一を直接の目的とし実際の編集に当たった。仕事のおそい山田は、促進の意味で序文に述べた四君の援助を請うことにしたが、結果的には仕事の質を高めることにこそなれ、促進の実は必ずしもあがらなかった。これは、四君に仕事を依頼する時、浄書にのみ終わることを用いない、必要有らば礎稿にかかわらず改善するを妨げない旨を漏らしたことと四君の資質とに起因する。かくて次第に手の入った礎稿は、年月の経過のままに旧態より遠ざかり始めた。山田が最終的に整備するに及んで面目は全く一新するに至ったが、時間の関係上まだ手の十分入らぬ項も少なくない。
2. 今回、特に銘記すべきは阪田・倉持両君の尽力により助辞関係の記事に大きな特徴を備え、かつ重要語の指示を行うことが出来たことである。かたわら、水平思考に長ずる倉持君は、問題語の語釈に一種天賦の才を発揮し、しばしば山田の諮問に応じ、夜を徹すること、最後の1年間に無慮数十日に及んだ。また、付載の特徴有る外国地名一覧は若杉君の労作によるものである。校正には前期十君の協力を得た。なかんずく、酒井君は終始著者側の代行として原稿合せ・赤字合せをしてくれた。幸いにして誤脱少なき有らば、功は一に同君にあるとって過言ではない。
3. 編集期間の最終1年を除く、この12年間に吾人は週一回編集会議を開き、重要語、問題語の語釈について協議を重ねて来た。春風秋雨、幹事としてこれを主宰したのは見坊である。
4. 見坊は、また生涯(ガイ)を賭(カ)けて収集しつつある語彙(イ)を惜しみ無く本書の新見出しとして提供した。金田一はアクセントを校すること旧のごとくであり、外来語のスプリングは新たに柴田が統一した。ただし、両項とも不審・不備の向きについては随時気付いた者が、これを正し、担当者の決裁を経た。

[コメント]

よくわからないことばに出会ったときに毎日のようにお世話になっている三省堂の新明解国語辞典のあとがきの一語一語は心にしみる。12年の準備の上で7年の歳月をかけて作っていただいた作品であるからこそ、何十年にもわたって毎日の使用に耐える。辞書はその国の大切な文化だと考える。もっともっと辞書の素晴らしさを知り、活用したい。

- 2010年10月21日 林 明夫記 -